

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年六月作品集

神話の国出雲

佐保 光俊

神話の国出雲と言われる。一般によく知られている出雲に関わる神話といえば、天皇家の祖先神アマテラスの弟神スサノヲが人を苦しめる大蛇を退治する「ヤマタノオロチ退治」と出雲の神オオクニヌシが傷ついた兔を救う「因幡の白兔」であろう。詳しい人になると、オオクニヌシが天皇家の祖先に国土を譲り渡す「因幡神話」を存してであろう。これら三つの神話は『古事記』（七十二年）や『日本書紀』（七十二）（以下、『記紀』）に出てくるものだが、実はもう一つ出雲神話を載せたものに『出雲国風土記』（七三三年）（以下『風土記』）がある。風土記における代表的な神話は、出雲の神ヤツカミズオミツノによる島根半島形成を題材にした「因引き神話」と呼ばれるものである。なお、風土記にはオオクニヌシという名の神は登場せず、これに相当する神として、国土開闢を行ったオオナムチという神が出てくる。また、記紀においては荒ぶる神として描かれるスサノヲは、風土記においては豊作を祈願して踊る神として登場するという違いもある。そして、記紀の先の三つの神話のうちの「ヤマタノオロチ退治」と「因幡の白兔」に類する話は、風土記には出てこないという違いもある。

ここで、記紀と風土記の出雲神話の違いの背景を見てみよう。記紀はヤマト王権（中央貴族）がまとめたものであり、風土記は出雲国造（地方の首長）がまとめたものである。そのため、記紀の神話にはヤマト王権の国家観が反映し、風土記の神話には出雲の土地に根付き、息づいた神話を取り上げられているという根本的な違いが生じている。ただし、一つ注意しておくべきことがある。それは『日本書紀』編纂の中心メンバーとなる忌部宿禰子首（いんべのすくねおびと）が七〇八年に初代出雲国司として着任し、数年間滞在したことである。この間『日本書紀』と風土記の記述に関して、出雲国造との間で様々な調整がなされたであろうことは想像に難くない。つまり、本来、出雲土着の神話のみを記載するはずの風土記の中に、異質な天皇家への「因幡神話」が組み込まれたのである。

こうした背景を踏まえながら、私は風土記に記載された場所や、古墳などを訪ねている。時代区分としては、弥生時代から奈良時代にかけての遺跡訪問であり、支配体制から見ると、出雲の人々が土着の勢力によって統率・統制され、やがてヤマト勢力に委食され、ついには律令体制に組み込まれていくという体制変化の軌跡をたどる旅である。その中で、今回の特別作品は、スサノヲとオオナムチ（記紀ではオオクニヌシ）に特にゆかりの深い古代出雲国飯石郡と大原郡を歩いた時の句でまとめたものである。本来、出雲国に限らず、どの国においても人々は土着の神を崇めていたはずであり、神話の国は出雲だけではない。神話の国出雲という先入観を捨てて、あらためて出雲土着の神を私なりに観念するために『出雲国風土記』を手に、これから出雲の旅を続けようと思っている。

出雲に入り最初の蝶の色は白

戦ふ神踊る神あり花万朶

青葉山巡らせ神は住むといふ

花冷の一步一步の御室山

須佐社 二句

女の子ふたり来てゐる春祭

大きな田に小さき田に蛸蛸生まれけり

飯石郡家

御衣黄のいまを盛りと郡家跡

船岡山

船もまた山に成るてふ飛花落花

御門

八重桜より暮れてゆく三刀屋かな

松本古墳群

桜葉降るや古墳はあのあたり

三瓶山

田水張り佐比賣山までまだ少し

畠境の山見えてゐる牡丹かな

どの道で蘇我は入りしか連翹よ

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

佐保先生の第四句集『吉備』に続く「出雲」。双方とも、大和と九州・朝鮮半島を結ぶ途中にあり、古代、地方の有力な勢力として栄えた。出雲国風土記があるためか、出雲地方に住む人々の心ばえによるものか、現代においても、出雲は、吉備や近江よりも古代に近いように感じられる。古代を胸に感じながら、作品を味わった。

戦ふ神踊る神あり花万朵

記紀では戦う神、風土記では踊る神。どちらの話が本当か今は知る由もないが、あふれるように咲く桜を、古代の人も現代の私と同じように胸いっぱい思いで眺めたに違いない。

花冷の一步一步の御室山

出雲国風土記に、「神須佐乃乎命（かんすさのおのみこと）、御室（みむろ）《神の御座所》を造らせなきて宿った所である。だから、御室という」とある。スサノオを身近に感じながら、桜の咲く山を一步一步登ってゆく。

大さ田に小さき田に蛸蚪生まれけり

「神須佐乃乎命（かんすさのおのみこと）が『この国は小さい国だがよい国なり。我名を岩木にはつけない』と言って自分の御霊を鎮め置き、大須佐田（おおすさだ）、小須佐田（おすすさだ）を定めた。だから須佐という」とある。この句は、まさに出雲風土記が今につながることを感じさせてくれる。スサノオも須佐の田のオタマジャクシを眺めたに違いない。

船もまた山に成るてふ飛花落花

「阿波柁間委奈佐比古命（あわきへわなさひこのみこと）が曳いてきて据えられた船が、この山である。だから、船岡という。」とある。船のような大きな形をした山なのだ。今は、満開の桜が風に舞い散っている。

《作品鑑賞》

亜矢

「神話の国出雲」は、作者がひたすら歩き、それぞれの場所を身を置いた作品である。出雲神話とは何か。情報があふれる現代において、自分の五感をもって考え、納得しようとする作者の姿勢は、重要な意味を持つことだと思う。

出雲に入り最初の蝶の色は白

「白」が効いている。これから始まる出雲の旅を、作者はまっさらな気持ちで臨んでいる。掲句の蝶が作者を象徴しているかのようだ。

女の子ふたり来てゐる春祭

須佐神社は、四月に大祭があるとのこと。男性が多い祭の中、女の子がふたり。地元住民だろうか。淡々と詠まれているからこそ、地域に根差した厳かな祭が想像できる。

桜葉降るや古墳はあのあたり

松本古墳は、前方後方墳で、県内最古の一つとされている。「あのあたり」ということは、はっきり形が見えないということか。それでも作者は、遠い昔を思いながらしばし見ている。当時はなかったであろう桜を詠むことで、その場所でのゆっくりとした時間の流れを感じる。

《作品鑑賞》

井藤希

八世紀に全国各地で編纂された風土記の中で完本が現在まで伝わっているのはこの「出雲国風土記」だけであると言う。風土記に記された山々や社寺、神話などを今の出雲に辿り、古代の気配に思いを至らせる旅はさぞ心躍るものであったに違いない。花の季節に古代から今に至る出雲が輝いている。

戦ふ神踊る神あり花万朵

花冷の一步一步の御室山

佐世の木の実を頭に刺して踊ったスサノオ、そのスサノオが御室を作らせて籠ったところから名がついた御室山。花の頃この句のスサノオは風土記のままにまことに素朴で種やかである。

船もまた山に成るてふ飛花落花

風土記では阿波のワナサヒコが引いてきた船がこの山（船岡山）になったという。盛んに花の散る中で、作者は出雲国と遠く四国の阿波国との古代の交流にどのような思いを巡らせたのだろうか。

田水張り佐比賣山までまだ少し

スケールの大きな「国引き神話」に出てくる山の一つが佐比賣山（三瓶山）である。活火山でもあるこの山へ行く途中の代田の静穏な風景に心が落ち着く。「まだ少し」に絶妙な距離感がある。

《作品鑑賞》

暁子

残念なことに、先生から教えて頂いた事以外には、記紀や風土記に関する知識は殆どありません。遙か昔の出雲はヤマト政権が無視出来ぬ程の力を持ちながらも、次第に体制に組み込まれて行きます。そんな中で信仰や神話、伝統などは生き続け、その長い時間の経過や寂寞が出雲に対するロマンとなり我々の心を惹き付けているのでしよう。

先生は風土記への深い思いの中に出雲を旅なさいました。

戦ふ神踊る神あり花万朶

超能力などなくても戦い、楽しみ、人生を謳歌する人間臭い神様が浮かびます。花万朶の季語が却って静寂な山深さを思わせます。

御衣黄のいまを盛りと郡家跡

御衣黄という美しい季語で郡家が活発に機能していた頃に一瞬引き戻されました。

大さ田に小さき田に蛸蛸生まれけり

雲州は峽の多い地と聞きます。棚田でしょうか、動物たちも又営々と命を繋いできたのです。過疎化の波は出雲にも押し寄せているに違いありません。そんな今、土着の神様たちは何を思われているのでしょうか。

《作品鑑賞》

知佳子

「古代の無名の人々に思いをはせ、神話に正面から向き合い作句をされる佐保先生の俳句を鑑賞させていただき、学びの多い時間でした。」

出雲に入り最初の蝶の色は白

何事にもまっさらな気持ちで対峙する、きっぱりとした覚悟が、蝶の色は白という体言止めから伝わります。

戦ふ神踊る神あり花万朶

古代の人々にとって神は今よりもっと身近な存在だったでしょう。花万朶という季語が、顔も知らない人々と私を繋いでくれるようです。

御衣黄のいまを盛りと郡家跡

御衣黄というゆかしい花の姿と、群家の盛衰に心打たれます。

船もまた山に成るてふ飛花落花

船が山に成るという、古代の人の伸びやかな感受性を思いながら、時を超えて昔も今も変わらない桜の散る様が目に見えます。

田水張り佐比賣山までまだ少し

田水に空が映る道。佐比賣山までの道のりに、神話の時代を楽しみながら大切な時を過ごす情景が伝わります。

山はまだ雨の残りて岩魚釣

風吹いて天気よくなる岩魚釣

卯の花をくぐりて竿を出しにけり

石垣が奥の奥まで岩魚釣

大岩魚水面に鰭を出しにけり

木を運ぶ人に手を上げ岩魚釣

全屎の沈む流れに岩魚割く

手際よく支度ととのへ天魚釣

松蟬のこれほど鳴かぬ日もあるか

松の木に沿うて上りぬ梅雨の蝶

佐保光俊

夏曉のあいさつ犬に飼い主に

まだ小さき二頭の揚羽飛びゆけり

手の内にくしゆと収まり柿若葉

朝風に香ってきたる花櫓

ポケットに青梅拾ふ行き帰り

あちこちに雀飛び立つ青野かな

来たといふ知らせか鳴いて四十雀

鳥誘ふ水に守宮のいつも来て

梅雨に入るスケボーやめぬ子らの声

山法師すでに朝日の高くなり

高尾ひとみ

風光る花いろいろと甕に活け

細くなりし足に纏はり蛭蝶

病院の花壇にひとつ花胡瓜

すっぱんの吾に近づく夏の蝶

裏山にしきりに鳴いて鴉の子

鴉の子隣とうちの屋根行き来

足跡の踏まれて消えて梅雨の坂

雨だれの音のさまざま梅雨最中

花南天鳥のいつきに散らしけり

花擬宝珠群れて窓下のすがすがし

あざみ

よきこいの演者集まる立夏かな

若景風抜けたる平和大通り

艶やかな市電の木の壁夏はじめ

うつすらと髪染めし子や夏はじめ

すれ違ふ香水の香にふり向きぬ

卯の花やトンネル徐々に早足に

食パンを提げて歩ける夏の朝

クレマチス母は迎への車待ち

番子で人呼ぶ役所走り梅雨

読み終へてゆつくりと閉づ夏の宵

ろ絞る吾子の背中よ杜若

爽だつや青梅筑に上げたれば

瓶深く梅眠らせて午睡かな

八千歩けふも歩いて枇杷の下

立飲みの喧騒にきみソーダ水

大胆にくづれて楽しかき氷

面白きほどに藪蚊のまつはりぬ

パナマ帽かう被れよと祖父の粋

夜濯や子らの寢息を気にしつつ

リビングの桃は熟れつつうたた寝す

鳶の輪の空の真青や夏に入る

飛鳥来る五月の港光濃し

耳立つる犬に向かふか麦の風

漣のやうに揺れたる樟若景

庭晴れて薔薇の初花咲きにけり

我を待ち薔薇の揺るるか五つ六つ

不形なる紅薔薇庭に華やぎて

手の触れて咲き切る薔薇の崩れけり

ほの香り黄の薔薇遅れ咲き始む

舗道行く赤や黄の傘走り梅雨

亜矢

綾乃

井藤希

退院の翁の顔や春の朝

小さき手で母と作りし柏餅

雨降つて紫陽花の色濃くなりぬ

満開のえごの花見て坂上る

園庭に泰山木の花香る

コーラスの友と舞台へ夏の午後

不如帰鳴いて淋しき夜明け前

白シャツで自転車漕いで坂上る

夏芝居平和を歌うこんにく座

合歓咲いて故郷のこと思ひけり

大畑恵

紫陽花の雫の青し雨上り

虎耳草濡らし山水池へ落つ

沢瀉へ雨音しげし夕まぐれ

螢飛ぶ水田の隅を戻りけり

黴匂ふアルバムを見て生家なる

雨兆す田植機はまだ動きをり

軒々に玉葱吊るし峡入日

百足の子囲む雨傘下校道

朝まだき沙羅咲く道と知りにつけり

緑蔭にまた別の人川眺む

暁子

山家着夏鶯をしばし聞く

片栗の周り残して露を刈る

薪割の音のこだまし夏木立

夫の手を持ち杜鵑花咲く庭歩く

肉を取り分けてビールも子がくれし

不如帰あけぼのに鳴きまた夜も

子の顔を思ひ浮かべてシャワー浴ぶ

備中の古墳を採す青葉山

短夜の土砂降り朝は止んでをり

車窓から大きく見ゆる青富士よ

すみれ

春時雨手帳に推しのシール貼り

春時雨志望動機を振り返り

沈丁花二人っきりのレイトショー

看板はゴシック体やヒヤシンス

学校の壁に落書きヒヤシンス

春めいてゲームのロケ地巡りをり

春めけるケースには舞う指輪かな

春の宵無人のコインランドリー

春深し社内旅行のアンケート

転職の相談されて花曇

竹田千紘

それぞれの方言交はし豆御飯

泣く赤子抱き上げあやす藍浴衣

ばかりと泰山本の花一つ

どの色も雨に濡れたり額の花

向き変へて近寄つて来るあめんぼう

鳥の影また過りては苔青し

舟虫を散らして辿る荒磯かな

あらかたの梅の実落とし日の暮るる

開け放つ教会の門百合の花

てつぺんの太陽映す植田かな

知佳子

燕の子母の施設で育ちをり

今朝咲ける隣の薔薇の見事なり

畦に沿ひ幼子蛸蛸を掬ひけり

放ちたる蛸蛸のそのままとどまりて

来ればまたお玉杓子の生まれるて

どの木にも実梅たくさんついてをり

裏山にもこもこもこと栗の花

青蛙取りて手に置く女の子

ガラス窓へばりつきたる青蛙

岩に立ち川鷄の羽を広げたり

ちどり

計報来て一日籠りし立夏かな

若き母の胸の赤子や新樹光

少年のフルート吹くや姫女苑

梅檀の花の盛りの淀の岸

金輪島似島宮島梅雨入かな

転ぶなど夫の声する梅雨の入り

枇杷剥いて大きな種の三つかな

枇杷甘し大きな種を吐き出して

泰山木けふ咲ける花あす咲く花

台風一過鯨めきたる雲ながれ

辻純江

蝶けふも我を慕うて舞うてをり

灯台から薰風を受け海に出る

あと先に天窓に来て燕の子

患ひて父の見つめる燕子花

心太残業の子に勧めたる

その家は十薬咲いて静かなり

坂の下梔子の香の充ち満ちて

白鷺のゆるり此方に近づきぬ

老鶯の方へと続く山の道

夕焼に吸ひ込まれたるホームラン

雲雀

八の字に歩くデパ地下麻暖簾

鉄鍋に餃子賑やか夜店開く

ひたひたと岸壁を打つ五月圍

短夜や釣り人なくて竿ならび

電気ウキ飛び交う夜釣り高架下

薔薇の門くぐるリボン付きブードル

薔薇ばかり湖畔の道は蛇行して

睡蓮の波紋風から湖底から

温室にインコ飛び交い咲く睡蓮

ボラソテア百花の土の草むしり

ふじ女

夏蜜柑抱いでよいかと旅の人

薄暑光セーラー服の眩しくて

榎の花すぐ上にある白き雲

木香薔薇窓に枝先揺れてをり

明け易し柱時計を見上げたる

梅雨の月遠くに住める吾子のこと

雨粒を雄蕊に溜めて透百合

短夜や夜勤明けたるバスの中

トンネルの前も後も青田なり

暑かりし母の声する夕焼雲

姪女苑久々に聞く鳥かな

未央柳君の笑顔にまた会はむ

土掻けば蚯蚓出てくる清掃日

W杯盛んな今日の沖縄忌

谷筋の水辺に蜻蛉生まれけり

五月雨の谷筋に向け流れ落つ

梅雨寒の日に祖母の里訪れる

変はらない香水の叔母母見舞ふ

茶の店にゆるゆる回る扇風機

往き来する人見るやうに玄葵

茄子の苗店を回りて買ひ足しぬ

夏の夜の着艦訓練玻璃震ふ

花は景に柱の疵の背丈かな

もう入れぬ柱の疵や花は景に

青山椒ちりめんじやこにあるパンチ

病院に庭の紫蘭の咲くを告ぐ

夏落葉義父追ひ抜きて妻生くる

路の景や煙立ちたる火葬場

初七日や散歩に啼いて杜鵑

涙腺の緩ぶ焼香螢の夜

松田裕子

村上正人

森口良樹

蓬摘むひとつの籠に影ふたつ

母と子の見上ぐる光の燕かな

土蛙よくよく見れば景陰に目

アスファルトから拾い上げ春落景

春落景葉としたり太宰の書

掌に載せたる石や春惜しむ

野の花に寄つては離れ夏の蝶

芍薬を覗けば虫の居たりけり

早苗田やひとつひとつの雨の跡

アスパラを摘んで見上ぐる朝の庭

春雷や伏せし表紙に愛の文字

開帳や風の中なる心柱

古墳への小道に沿うて葱坊主

玄室を出ればたかな二二本

大判の地図の埃や夏浅し

老鶯に山門赤き里の昼

また一つ灯りの増ゆる植田かな

文机の今朝の一輪杜若

宮島の波の静かに夏に入る

二人して見つめてをりぬ初夏の海

夏木立ロープウェイまでまだ遠く

夏風やぐんぐん上るロープウェイ

夏の海ロープウェイから見てをりぬ

山道をゆつくり下り風薫る

緑蔭のベンチに二人話したり

南風お守り二つ買うてをり

こだまする運動会のアナウンス

秋楡

今井淳子

土肥律子

川の字で話続くや蛙鳴き

黒揚羽また出会ひたりけふの午後

見上ぐれば親来て騒ぐ鶯の巣や

こちらにもこちらにもある若葉かな

あちこちに植ゑしあやめのみな咲きぬ

母の日や母なき年を重ねつつ

どつさりど今年ももらひ梅漬ける

青葉見て撮りし写真を見返せり

万緑を映す川面や橋に立ち

をっ

夏の朝早出の目覚し時計かな

青田風校庭の旗靡かせて

白線の分かつ校庭青田風

先輩に傘を借りたる梅雨入かな

紫陽花に溜まりし雨の色映す

鳥止まる木の根を洗ふ梅雨の川

訪ねゆく美人の露天湯山滴る

鏡めく高原の川星涼し

同胞と吊るしし蚊帳に虫の穴

山野ウタ

煙噴く九重の山の躑躅かな

水芭蕉見るため登る山陰し

里山を映し早苗田雨の中

片白草雨しととと庭の隅

夏椿夫と眺めし藤戸寺

山梔子の花の古びる早さかな

天道虫足を畳んで腹を見せ

前田範子

景陰よりひらりと出て揚羽蝶

庭中を所狭しと揚羽蝶

五月雨や一つの傘に母と子と

五月雨や手あたりしだいパズル埋め

五月雨をばんやり聞きつ句を詠みぬ

大原良子

梅雨前の溝の掃除を一音に

庭の実梅碗いで瓶に酒注ぐ

梔子の花を供へて雨しとど

教室に目高泳がせ参観日

名人と呼ばれ草笛子らに吹く

高嶋絹代

大木にツリーのごとく藤の花

入梅やコンテナ船は岸離れ

着地して深き足跡梅雨に入る

浴衣着の結び目楽しどうか山

青柿に仔犬のそつと近づきぬ

高梨英子

栗の花納屋の方より匂ひ立つ

老木の小さき青梅付けてをり

夜通しの雨に濡れをり花石榴

尺蠖の一步進んでまた一步

山道の鹿の親子に道譲る

美耶

爪立ちて桜の一枝取りにけり

手を伸ばし夏みかん三つ取りにけり

妹と景桜の道散歩する

裏庭に額紫陽花の咲きにけり

河原静子

路茂る一本道を進みたり

遠雷や一步一步を確かめて

南天の花こぼれたる勝手口

青柿を避けていつもの朝の道

撫子

紫陽花の昨日より濃く咲いてゐる

単線の夏草揺らす午後雨

窓を開け風入る梅雨の中休み

上島康子

初トライ材料揃へ梅漬くる

紫陽花の雨の重さに揺れてをり

微睡みに聞こえてゐる時鳥

上條忠

山の道水田に映る雲を見て

梅雨晴間木々のざわめき見てをりぬ

山法師あちらこちらに咲くを見る

紀英子

夏燕今朝は高くに晴れ渡る

濃紫陽花足湯に浸かる旅路かな

黒南風やひと日小説読み耽り

熊谷ゆり子

梅雨どきの鴉の声の遠く近く

鮎食うて雨本降りとなりにつけり

夾竹桃橋渡りてもまた咲いて

桑門わかこ

朝の薔薇剪定済みし帰り道

オレンジの日傘をくれし新店舗

扇風機回す書類に重石して

桜陽

あやめ剪る子の指白し葉の青し

紫陽花の暮れて仄かに浮かびたる

柿の木の青景時雨を待つてをり

志路猿

忙しげに燕飛び交ふ空家かな

芍薬が所狭しと道の駅

青嵐木々の古景を散り散りに

民

日暮れ時花菖蒲へと水流れ

更衣背広残して遊きにけり

バス停にサルビア燃ゆる里帰り

森田敦子

窓若葉ケーナの音に浸りけり

雨しとどゆらりゆらりと額の花

一粒づつ数へて食ぶるさくらんぼ

やす保

花に来る蜂さへも友老いし我

ワイキキに雄鶏の声夏の朝

枝豆の塩加減よく茹で上がる

和田史子

故郷に麦を刈りし日遠くなる

山の本々大きく揺らし南吹く

みさ子

新月に仙人掌の花咲き初むる

向日葵にゴッホを重ね眺めをり

弥生

令和八年五月度作品集より

ちどり 私の選んだ十句

しばらくは夢に見るらん主岩魚
思ふさま枝を広げよ里桜
看護師の香水の香のほのかなり
書き物を止めて本読む昭和の日
葱坊主切つて畑の仕事終ふ
ひとりでも生きよと桜吹雪かな
瑠璃越しの病棟十階海難
レコードの浮いては沈む春の宵
我を見る亀の眼や春の昼
ぐんと踏む自転車先の山笑ふ

佐保 光俊
高尾 ひとみ
あざみ
亜矢
すみれ
辻 純江
森口 良樹
秋 楡
今井 淳子
なつ

辻 純江 私の選んだ十句

しばらくは夢に見るらん主岩魚
かたかこの花訪ねれば五輪ほど
ふいに向き変へてこちらへ夏の蝶
バエリアを取り分けてゐる春の昼
ほととぎす産土神へ澄けはし
外れたる天気予報や水温む
薫風や転がる帽子追ひかけて
我が影とともに歩いて春の月
桜蔭降るや生家を皆出でて
新緑や泣いて勝ちたる泣き相撲

佐保 光俊
高尾 ひとみ
あざみ
井藤 希
暁 子
竹田 千紘
知 佳子
雲 雀
松田 裕子
山崎 桂子